

山岳文献にみられる 1945 年以前の丹沢における ニホンヤマビルの生息情報

逢沢 峰昭

Mineaki Aizawa:
Information on inhabitation of a land leech species
(*Haemadipsa japonica*) on the Tanzawa Mountains before 1945
obtained from mountaineering literature

はじめに

環形動物門環帯綱ヒル亜綱のヒル下綱に属する分類群をヒル類といい(中野, 2013), このうち陸上生活に適応し, 吸血性を持つものを陸生ヒルと呼ぶ(Lai *et al.*, 2011). 日本にはニホンヤマビル(*Haemadipsa japonica*)とサキシヤマビル(*H. rjukjuana*)の2種の陸生ヒルが分布する(Lai *et al.*, 2011). 秋田から屋久島までの本州, 四国, 九州には, ニホンヤマビル1種のみが分布する(Oka, 1910; Lai *et al.*, 2011).

丹沢のニホンヤマビル(以下, ヤマビル)は, 2001年には神奈川県愛甲郡清川村を中心とした東丹沢に分布していたが, 2008年には丹沢北部, 東部, 西部などに急激に分布拡大した(岩見・高橋, 2009; 神奈川県ヤマビル対策共同研究推進会議, 2009)。その結果, 里山や農耕地のほか住宅地にまでヤマビルが出現するようになり, 林業従事者や登山者のみならず, 住民にまで吸血被害が及び, 大きな問題となっている(神奈川県ヤマビル対策共同研究推進会議, 2009)。ヤマビルの分布拡大の経過を把握する上で, 元来ヤマビルが生息していた場所を特定ないし推定することは重要である。岩見・高橋(2009)は, 丹沢におけるヤマビルの元来の生息地に関する研究資料や文献がないことから, 旧津久井郡津久井町鳥屋の住民に対して聞き取り調査を行い, 1945(昭和20)年以前の生息地として, 津久井町鳥屋奥野地内の早戸川流域とやや上流に位置する国際マス釣り場から上流の右岸, および丹沢山と蛭ヶ岳を結ぶ北面の沢筋を挙げ, この一帯からヤマビルが分布拡大したという結論を得ている(図1)。しかし, 聞き取り調査によって得られる情報は年代的に限界がある。したがって, もし, 1945年以前のヤマビルの分布に関する文献がみつければ, 元来ヤマビルが生息していた場所を特定する上で有益な情報が得られる可能性がある。

丹沢は, 1905(明治38)年9月に武田久吉や高野鷹

蔵らが塔ノ岳に登って以来, 明治後期から大正時代にかけて少なからぬ登山紀行文, 記録や解説が書かれている(高野, 1906; 武田, 1910; 1913; 1920; 1924a; 1924b; 1924c)。また, 大正末期から昭和初期には東京近郊の山として丹沢登山が盛んになり, この時期にも登山記録や案内書が多く出版されている(例えば, 河田, 1923; 菅沼, 1931; 秦野山岳会, 1938; 山と溪谷社, 1952)。また, 当時から丹沢は沢を登路とした登山が盛んで, 沢登りに関する案内文や記録も少なくない(坂

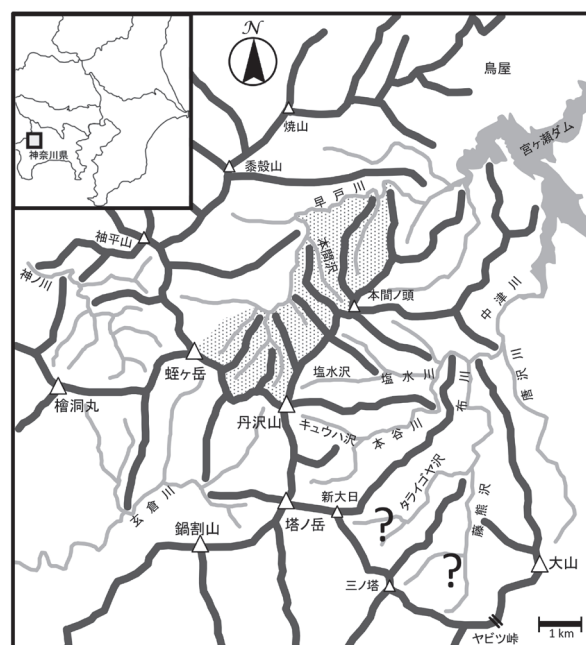


図1. 丹沢における1945年以前のニホンヤマビルの推定生息地(早戸川右岸域および上流域の点字部分; 岩見・高橋, 2009)と本研究により明治中期以前のニホンヤマビルの生息地であることが示唆された布川上流域(場所の特定ができないため, およその位置に疑問符を付して示した)。

本, 1940; 山と溪谷社, 1958; 東京雲稜会, 1969)。ヤマビルは元来湿った沢沿いなどにみられる(Whitman, 1886; 飯島, 1887; 佐々木, 1904) ことに加え, 吸血が人の印象に残ることから, 特に沢を登路とした案内文や記録などの山岳文献を調べることで, これまで文献情報のなかった 1945 年以前の子マビルの生息に関する知見が得られる可能性がある。南アルプス南部を例にとると, 冠(1979)の紀行文には大正 8 年夏に遠山川の便ヶ島で, 黒田(1929)や深田(1982)の昭和初期の紀行文には, 遠山川の北又度で夏にヤマビルに吸血された記述がある。1990 年代の丹沢の沢登りの案内書には, 清川村にある本谷川のキュウハ沢, 塩水川の塩水沢, 旧津久井町の早戸川の本間沢でヤマビルによる吸血被害の記述がある(丹沢溪谷調査団, 1995; 図 1)。

本研究は, 明治期以降の山岳文献を調査し, 1945 年以前の丹沢におけるヤマビルの生息に関する情報を収集・整理することを目的とする。

調査方法

国立国会図書館, 神奈川県立図書館, および筆者が個人で所有する大正 12 年から昭和 44 年に出版された丹沢登山に関する登山案内書や紀行文集(河田, 1923; 横井, 1927; 1935; 菅沼, 1931; 神奈川県, 1935; 秦野山岳会, 1938; 坂本, 1940; ハイキング・ペン・クラブ, 1941; 塚本, 1944; 山と溪谷社, 1952; 1958; 横浜

山岳会, 1955; 諏訪多, 1961; 全国林業改良普及協会, 1962; 東京雲稜会, 1969) を閲し, ヤマビルに関する記述を探した。さらに, 明治から昭和初期の登山記録や紀行文等が掲載されている山岳雑誌, すなわち, 「山岳」(日本山岳会), 「山小屋」(朋文堂), および「山と溪谷」(山と溪谷社) を調べた。これらの雑誌は, 国立国会図書館においてデジタルアーカイブスとして閲覧できる。「山岳」は 1906 (明治 39) 年から, 「山小屋」は 1931 年(昭和 6) から, 「山と溪谷」は 1930 (昭和 5) 年から, いずれも創刊号から 1950 (昭和 25) 年までの掲載文の全タイトルをデータベース化し, 「丹沢または丹澤」, 「塔ノ岳あるいは塔ヶ岳」, 「大山」, 「蛭ヶ岳」, 「桧(檜)洞」, 「大室山」, 「早戸(川)」, 「本谷(川)」, 「塩(鹽)水(川)」, 「神ノ川」, 「玄倉(川)」などの地名や「山蛭」あるいは「ヤマビル」をキーワードに検索をかけ, ヤマビルに関する記述を探した。

結果と考察

調査の結果を表 1 にまとめた。山岳文献にみられるヤマビルの記述は, 塚本(1944)や梅沢(1917)のように蛭ヶ岳の山名に関連して書かれたものが目立った(塚本 1938 に詳しい)。また, 伝聞や文献の情報元が明示されていないなど, 客観性に乏しいものも少なくなかった。その中であって, 武田(1952)は個人への聞き取りを基に記載しているため, 比較的信頼に足る情報であ

表 1. 本研究の文献調査で得られた丹沢における 1945 年以前を中心としたニホンヤマビルの生息に関する記載

年代	記載内容(注 2)	文献
明治中期以前	明治中期以前は山蛭が多かったことも事実である。	塚本(1944)
明治中期以前	蛭ヶ岳は明治中ごろまで山蛭の多い山であったと云う。	柴田・田代(1962)
明治末期以前	丹沢の主といわれた故加藤半左衛門氏の談に, 昔は布川上流の山中には山蛭が頗る多かったという。	武田(1952)
明治 38 年以降	1905 年の秋 9 月, 初めてこの山塊(丹沢山塊)に足を入れて以来, 山蛭に出遭ったことはない 丹沢の山蛭も明治の晩年以降絶えたものであろう。	武田(1952)
大正 6 年以前 (注 1)	この山(蛭ヶ岳)には山蛭がたくさんいるという話がある。自分は焼山山麓の 2, 3 箇所でもこの話を聞いたが, 何かの書物に書いてあるのがあったとか聞込んだことがある 実際, 自分はこの山(蛭ヶ岳)で山蛭は見かけなかった。もちろんないと断言はしないが, むやみにたくさんいないことは確かだと思う。	梅沢(1917)
昭和 37 年以前 (注 1)	地人のいうヤマビル <i>Haemadipsa japonica</i> について筆者らはまだこれを確認したことはない	柴田・田代(1962)

注 1: 年代が特定できないため, 便宜上, 出版年以前とした。

注 2: 記載内容中の括弧内の語句は逢沢が補った。

る。武田（1952）は加藤半左衛門氏の聞き書きを基に、中津川の布川上流域の山中において昔はヤマビルが頗る多かったと記している（表1）。この聞き書き中の“昔”がいつ頃なのか記述はないが、加藤氏が明治8年頃の生まれである（昭和17年時点で67歳；加藤ら1942）ことを考慮すると、塚本（1944）の記述（表1）にあるように明治中期頃と想像できる。布川は上流でタライゴヤ沢と藤熊川に分かれるため、どのあたりを具体的に指すのかははっきりしないが、概ね新大日からヤビツ峠に至る稜線の北側付近と想像できる（図1）。角田ほか（2007）による丹沢における2001年のヤマビルの分布域をみると、布川流域はそのほぼ中心に位置しており、明治中期以前にこの流域にヤマビルが多く確認されたとしても不思議ではない。これらのことから、明治中期以前の丹沢において布川上流がヤマビルの生息地の一つであった可能性が示唆される。

また、本調査の結果、資料は少ないものの、武田（1952）や柴田・田代（1962）のように、明治末期以降から昭和中期以降のある時期まで丹沢ではヤマビルは絶滅した、ないしみられないという記述のある資料が確認された（表1）。やや後の時代になるが、丹沢の山に詳しくあった吉田喜久治氏は「丹沢記」（吉田，1983）の中で、「現実に蛭に吸いつかれた話はほとんどきかない。とくに蛭ヶ岳でとか、そこに多く棲息した話もない。布川上流に多かったなんてのはつくり話めくし、いわでもがなのこと」と丹沢のヤマビルの分布を否定している。これらのことから、明治末期から昭和中期以降のある時期まで、丹沢ではほとんどヤマビルが確認されないほど生息が限定されていた可能性が示唆される。

引用文献

- 深田久弥，1982. 山岳展望. 264 pp. 朝日新聞社，東京.
 秦野山岳会，1938. 丹澤. 120 pp. 秦野山岳会，秦野.
 ハイキング・ペン・クラブ，1941. 丹澤山塊. 336 pp. 登山とスキー社，東京.
 飯島 魁，1887. 山蛭. 人體寄生動物編，pp. 433-434. 丸善商社，東京.
 岩見光一・高橋成二，2009. 丹沢山地におけるヤマビルの生息分布と生育環境. 神奈川県自然環境保全センター報告，(6): 21-35.
 冠松次郎，1979. 溪. 284 pp. 中公文庫，東京.
 神奈川県，1935. 丹澤案内. 49 pp. 神奈川県，横浜.
 神奈川県ヤマビル対策共同研究推進会議，2009. ヤマビル対策共同研究報告書. 107 pp. 神奈川県，横浜.
 加藤半左衛門・諸星梅吉・佐藤浅次郎・漆原 俊・根本行道，1942. 丹澤古老鼎談會. 山と溪谷，(73): 96-104.
 河田 楨，1923. 一日二日山の旅. 392 pp. 自彊館書店，東京.
 黒田正夫，1929. 遠山川西澤より西澤岳へ登る. 山岳，23(2): 167-191.
 Lai, Y. T., T., Nakano & J. H. Chen, 2011. Three species of land leeches from Taiwan, *Haemadipsa rjukjuana* comb. n., a new record for *Haemadipsa picta* Moore, and an updated description of *Tritetrabdella taiwana* (Oka). *ZooKeys*, 139: 1-22.

- 中野隆文，2013. 東アジア産巨食性ヒル類の多様性研究. 日本動物分類学会誌，34: 2-10.
 Oka, A., 1910. Synopsis der Japanischen Hirudineen, mit Diagnosen der Neuen Species. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 7: 165-183.
 坂本光雄，1938. 丹澤山塊の山名について 蛭ヶ岳篇. 山と溪谷，(49): 34-39.
 坂本光雄，1940. 丹澤の谷歩き. 252 pp. 体育評論社，東京.
 佐々木忠次郎，1904. 人體の害蟲. 98 pp. 雙輪閣，東京.
 柴田敏隆・田代道彌，1962. 丹沢の動物分布. 全国林業改良普及協会編，丹沢—その自然と山歩き—，pp.132-172. 全国林業改良普及協会，東京.
 菅沼達太郎，1931. 東京近郊の山と溪. 336 pp. 大村書店，東京.
 諏訪多栄蔵・山崎安治・安川茂雄・山口耀久，1961. 現代登山全集 8 富士 丹沢 三ツ峠. 274 pp. 東京創元社，東京.
 高野鷹蔵，1906. 塔ヶ嶽. 山岳，1(1): 58-78.
 武田久吉，1910. 丹澤山の登路に就て. 山岳，5(2): 416-417.
 武田久吉，1913. 丹澤山. 山岳，8(3): 552-562.
 武田久吉，1920. 丹澤山塊に關する資料. 山岳，15(2): 172-188.
 武田久吉，1924a. 丹澤山塊略説 (一). 科学知識，4: 258-264.
 武田久吉，1924b. 丹澤山塊略説 (二). 科学知識，4: 416-421.
 武田久吉，1924c. 丹澤山塊略説 (三). 科学知識，4: 524-533.
 武田久吉，1952. 丹沢の自然界. 山と溪谷社編，丹沢の山と溪，pp. 6-16. 山と溪谷社，東京.
 丹沢溪谷調査団，1995. 丹沢の沢110ルート. 255 pp. 山と溪谷社，東京.
 東京雲稜会，1969. 丹沢の山と谷. 306 pp. 山と溪谷社，東京.
 塚本閣治，1944. 丹沢山塊. 164 pp. 山と溪谷社，東京.
 角田 隆・川島充博・永田幸志，2007. ヤマビル. 丹沢大山総合調査団編，丹沢大山総合調査学術報告 (2007)，pp. 357-359. 神奈川県，横浜.
 梅澤親光，1917. 相州蛭ヶ岳. 山岳，11 (3): 670-678.
 Whitman, C. O., 1886. The leeches of Japan. *Quarterly Journal of Microscopical Sciences*, 26: 317-416.
 山と溪谷社，1952. 丹沢の山と溪. 257 pp. 山と溪谷社，東京.
 山と溪谷社，1958. 丹沢の山と谷—登山地図帳—. 263 pp. 山と溪谷社，東京.
 横浜山岳会，1955. 丹沢. 161 pp. 朋文堂，東京.
 横井春野，1927. 何の山へ登らふか. 315 pp. 行人社，東京.
 横井春野，1935. 登山案内；並にハイキング・コース 上巻 (関東・信越篇). 387 pp. 白揚社，東京.
 吉田喜久治，1983. 丹沢記. 491 pp. 岳書房，東京.
 全国林業改良普及協会，1962. 丹沢—その自然と山歩き—. 262 pp. 全国林業改良普及協会，東京.

逢沢 峰昭：宇都宮大学農学部森林科学科